

### (3) 長崎市高浜地先における“春藻場”造成 (2010~2012年)

キーワード：春藻場、ウニ駆除、ウニの身入り改善

【背景】温暖化による環境変化等の影響で藻場が減少し、アワビ、サザエの漁獲量の減少やウニの身入りの悪化等がみられ、特に身入りの悪い痩せウニは漁獲対象にならず放置されたまま増加し、磯焼けの拡大を助長させる悪循環を引き起こしていました。また、地元では磯焼け対策が行われてきましたが、単発的で継続せず、十分な成果には繋がっていませんでした。そこで、2010年から高浜地区の青壮年部活動の一環として、若手4名を中心に磯焼け対策が始まりました(西日本新聞 2013年3月13日)。

【方法】放置された大量のウニ(図2-24A)を効率的に駆除するため、自然の海底地形を利用し、ウニの侵入が困難な砂地で切り離された瀬(離れ瀬)を対象に、1つずつ徹底した駆除(素潜りによる獲り上げ)が行われました(図2-24B)。駆除面積は、1年目1,700㎡、2年目3,500㎡、3年目7,000㎡の3年間で延べ12,200㎡に及びました。また、作業時間は一日平均7時間に及び、3年間で80日程度行なわれ、駆除後の定期的な効果の検証を行いながら進められました。

【結果】ウニ駆除開始の翌春には、これまで無節サンゴモ類主体の磯焼け帯では、小型海藻類を主体に、ワカメやホンダワラ類の大型褐藻類の分布がみられ、被度は疎生~密生となりました。取り組み2年目の春には、ワカメ、キレバモク、マメタワラ、ウミトラノオ等の大型褐藻類が主体となり、小型海藻類の分布と併せ濃生となり、春藻場が形成されました(図2-24C)。このようにウニ駆除を行った磯焼け帯では、駆除1~2年で海藻の分布が増加し、3年間の取り組みで1.2haの“春藻場”が形成されました。このことで、ウニの身入りが改善されて(図2-25)、ウニの漁獲が促進されること

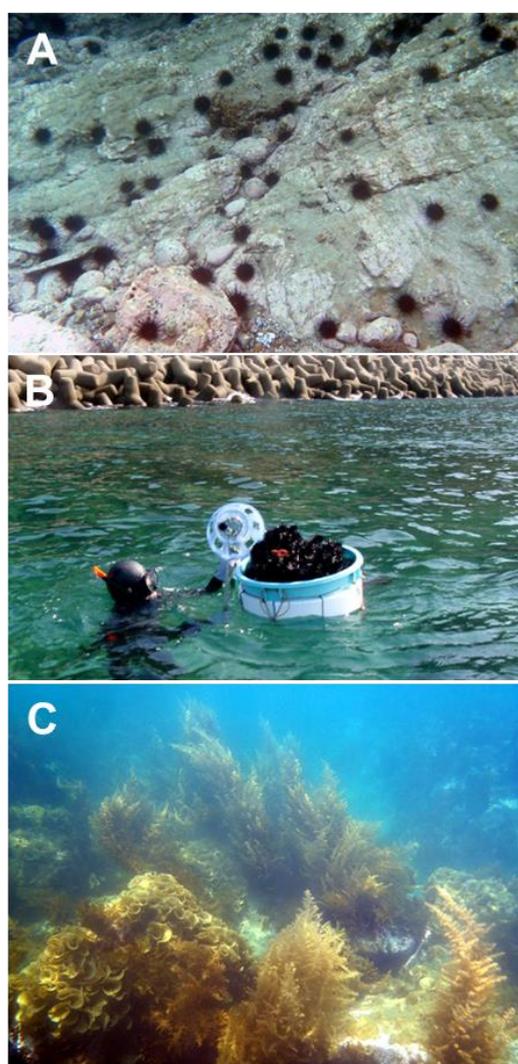


図2-24 高浜地先における藻場回復の取り組み

A: 磯焼けした漁場、B: ウニ駆除作業、C: ウニ駆除2年後の春の海藻の繁茂状況

により、ウニの低密度管理に繋がるようになり  
ました。加えて、サザエ、アワビ、イセエビが  
目につくようになり、今後の磯根資源の増加が  
期待されています。

**【考察】** 今回の藻場の回復は、作業の検証を行  
いながら徹底したウニ駆除が実施されたことに  
加え、ウニが侵入し難い飛び瀬を選ぶなど場所  
の選定も事前に検討されていることがポイント  
です。また、青壮年部員若手4名を主体とする  
活動でしたが、小人数での作業は、労力や範囲  
が制限されるデメリットがありますが、意志の  
疎通が図られ、小回りのきいた絞り込んだ作業  
が行える等のメリットが大きかったと思います。  
今回の成果が地元浸透していき、地域全体の  
取り組みへと進展していくことが期待されます。

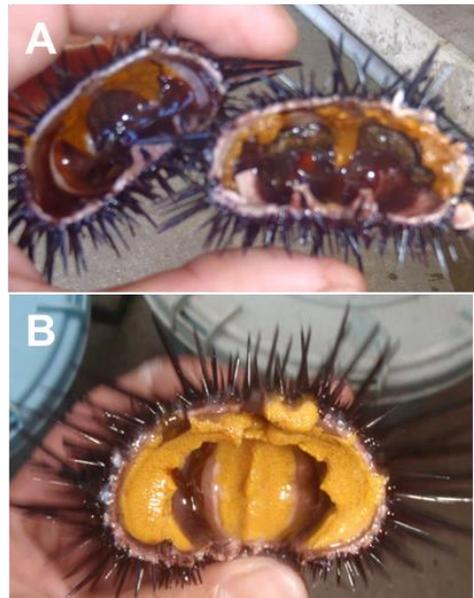


図 2-25 ムラサキウニの身入り状況  
A：藻場造成前の磯焼け漁場のウニ、  
B：ウニ駆除実施翌春のウニ